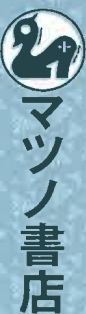


児玉將軍十三回忌寄稿録

付・児玉藤園將軍逸事



秋山好古から渋沢栄一、
児玉花外、新渡戸稲造
に至る九十余名による
『十二回忌寄稿録』に
秘書の書いた台湾総督
時代の逸話集を加え、
本邦初復刻



マツノ書店

児玉將軍十三回忌寄稿録

内容見本

(65%縮小)

そこで我總司令部は日を期して三面から遼陽の敵陣を突かうと云ふ計
畫悲しい事には折柄雨期に入つて大雨の爲めに出水し、交通は殆んど遮斷
されたので餘儀なく暫く天候の回復を待つ事となつた。
將軍は滿洲の滯陣中、毎朝人より早く起出ては人知れず建物の小影に至
り合掌して東方に向ひ連りに祈願をこらして居た。始めは誰も氣附かなか
つたが一日親近の人がその容子を訝つてこつそり將軍のなす所を窺ひ見
れば獨り便所の小影に立つて口に祈りを唱へつゝ合掌して居る。
「何をなすつて居らっしゃいます」
と問懸けた時將軍は莞爾かに

「我軍の爲に神の加護を祈つて居たのだ」……

との事以て如何に將軍が敬虔眞摯の人であるかよわかる……さうかと
思ふと、まだ朝の食事も済まさないで陣營を見まはり、歸れば又寢臺に横に
なつて小唄を唸つて居るやうな事もあつて一向威嚴を示すやうな事はし
なかつた。大山總司令官は護衛の憲兵等を連れて巡廻するのが常であつた

に反し將軍は副官でも伴れて歩くのが關の山で、大山大將から護衛兵でも
連れて歩いてはどうかとの注意を受けた事は再三あつた。併し何處までも
氣輕な將軍は其歴四角張つたことは大嫌ひでいつもブラ／＼單身で出懸
ける。

こんな工合であるから部下の將校から報告など來ると如何な夜中でも
勿ね起きて副官を起すまでもなく自ら之れを見るのを常として居た。それ
で用事が済めば又ゴロリと横になる。その様子は恰も陣中にあるのを忘れ
て居るやうな様子である。

……そして強雨の爲め遼陽攻撃を一時中止して滯陣する事となつた間
も、大抵の者は屈託して毎日々々降りしきる陰氣な天候に頭を悩まして居
たが、大將のみは一向そんな氣配も見えぬ閑さへあれば各地の知人や部下
に音信を通ずるを怠らず、或は部下と語り、或は諸軍を勵まし、又時に詩を題
し、書を認めて巻を散じた。

その頃將軍が大本營の幕僚に送つた繪葉書に

一三九



北洋總督の軍機

■ 体裁	A5判上製箱入 566頁
■ 定價	一万二千円(税込・送料別)
■ 予約特価	一万円(税・送料共)
■ 特価締切	22年10月31日
■ 刊行	22年12月上旬

限定三百部 (番号△)

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK
山口県周南市銀座2-13
☎083-940-2955 マツノ書店
URL: <http://www.matsunosoten.com>

●「申込ハガキ」にあるセット特価をご利用下さい。



復刻版の装幀です
(デザイン・毛利一枝)

西南役當時の麒麟兒

熊本鎮臺の危急

子爵 末松 謙 澄

兒玉將軍は、身體矮小にして然も膽あり略あり。歴史家は、或は之を形容するに、精悍の一語を用ゐるならん乎。吾輩が、將軍の名を初めて聞いたのは、明治八年の熊本神風連の騒動の時であつた。其當時將軍は、大尉か少佐位であつたかと思ふ。其際將軍より上級の將校は、孰れも敵刃に殞れて、熊本鎮臺は其指揮者を失ふて、潰亂するより外はなかつた。其時熊本鎮臺の兵を指揮するには、將軍より他になかつたので、直に上長官に成り代つて急速に一切の始末を爲し、僅に其大潰亂するを防止することが出来たのである。當時其働を今の山縣元帥が頻りに賞讃して、予に物語をしたことを確かに記憶して居る。此時に於ける將軍の材幹の發露振りは、以て後來に於ける、將軍の諸方面に於ける發展を、察知すべきものと思はれた。

吾輩は茲に、將軍の決斷力の如何に強かりしかを語ろう。开は明治十年戦役の時、吾輩は大本營附として、戦地に出張して居つたが、城山陥落せる頃、熊本附近の戦場を巡覽して歸京せんと欲し、山縣參軍の許可を得て、鹿兒島より陸路熊本に出て、折柄熊本にて會合したる犬養毅氏と同行して佐賀に抵り順路東京に歸つたのであつたが、其際熊本にて旅費に不足を來し困れるより、直に熊本鎮臺に赴いて(當

夫れから、私が特に兒玉將軍と懇意になつたのは日露戦争中である。私が明治三十七年の二月に、政府の内命を受けて、米國に行くことになつた、其頃兒玉將軍は内務大臣を罷めて參謀總長であつたから、私は先づ米國に行くに就て、種々軍事上のことも一通り聴き、又兒玉將軍の考へも聞かうと思ふて、參謀本部に將軍を訪ふた。雖て將軍の部屋に通つて見ると、將軍の部屋内には大變な書類が積積して、將校などが居つて、種々と將軍に用事を聴いて居て、將軍は之に對して裁決を下し、命令を發し、後から後から來るものに對して、夫々處置を與へて居る繁忙であつた、夫れにも拘らず、將軍は傍らに居つた多くの將校等を遠ざけて、私と將軍と二人差向ひとなり、其處で將軍は、私が米國に行くに就て會に來た理由を述べた。所が將軍は、米國に行くことに就ては種々自分も聞いて居つたが、君が愈行くことを聴いて、自分も非常に喜ぶ次第である。殊に米國に行くことは、今日我國外交上の爲め、又國の爲め非常なること、君が其使命を帯びられたことは、自分としても非常に満足に思ふと言ふて、將軍は私の渡米に就て、滿腔の誠意を以て欣んで呉れたのである。

三十日間家に歸らず

其時に將軍の計畫に就て種々話があつたが、其中で、未だに私の念頭に殘つて居るのは、『我輩は恰度今日で三十日間家に歸らない、此茶褐色の軍服を着た儘、此處で三度の食事を攝り、夜も此部屋に軍服を着た儘、寢て計畫をして居る』と將軍の語つたことであつた。其頃は丁度二月の寒い時で、將軍は唯だ、外套を頭から被つて其部屋に寝ね、而して國家の爲め、腦漿を絞つて居たのであつた。其處で私は將軍に向ひ、『君は三十日も家に歸らず、夫れだけの計畫をして、苦心に苦心を重ねて居るやうだが、一體今度の戦争は日本が敗けるのであるか、勝利を得るのであるか、僕は是から米國に行つて、公會の席で舌の續く限り演説もし、又筆を以て英文で日本の事を書いて新聞にも出す、僕は舌と筆を以て、十分今度の戦争に就て骨を折るが、若し僕が公會の席で熱心を以て演説をして居る際に、不幸にも日本が戦に敗けたと云ふやうな電報でも來た時には、僕は演壇からスゴ／＼降りて赤面しなければならぬ。或は晩餐會に呼ばれて、食後日本の爲めに演説をして居る時に、日本が敗けたと云ふやうな電報が來た時は、寢に面目がないことに終る。夫れが爲め僕は遂に公會の席で演説も出來ず、又晩餐會での食後演説も出來ないことになる。夫れ故に、君に今度の戦争は敗けるか勝るか、と云ふことを尋ねたいと思ふ、即ち參謀本部の計畫は、勝つ見込があるか、どうかと云ふことを突込んで問ふ次第じや。』

最後の勝利は我

すると兒玉將軍の曰く、『其事だ、夫れに就て、俺も三十日間轉戦して、其計畫を進めて居たが、漸く俺の腹の中に決まつたことがある。然し君も米國に行つて、演説の最中に敗報を聞くと、豫期して呉れなくては困る、けれどもそれは運戦運敗ではない。俺の見込みでは、今度の戦争は四分六であると思ふ日本が六分で露國四分夫れ故に敗報も、君の演説中に四度位はあるかも知れぬ。其處は覺悟して居つて貰はなくてはならぬ、即ち四度位は悲しい報告を公衆の前で聴くの覺悟が必要であるが、究極勝利は我れにあると言ふ意味だつた。其處で私も『夫れなら宜しい、四度迄敗戦の電報を見る決心で行かう。』

兒玉將軍十三回忌奇稿録 内容見本

併し最後の勝利は我れにありと云ふのだから、僕も大に安心して渡航し、國家の爲め盡さうと云ふた所が、將軍も喜ばれて『君が暇乞に來られたので話すことも済んで安心した、尙米國の事は米國から君の報告を受け、此方の事は又一々電報で知らせやうと云ふことと別れた。』

噫、英雄 竟に 亡し

所が其後兒玉將軍は、滿洲軍の總參謀長として滿洲に渡つて干戈を交へたが、私の所へ來る電報は、孰れも連戦連捷である。开て私は、緋育から滿洲の兒玉將軍の所に手紙で『四度迄敗報を聞く積りであつたが、未だ一度も敗報を耳にしな、聴く所のものは連戦連捷である、實に斯の如き巧しいことは無い、此米國の公衆の面前で演説をして居る時に、勝利の電報が來て之を讀上げることは、實に何とも形容の出來ない絶大なる愉快である。是は全く君が其計畫宜しきを得たものと思ふ、大に我輩は君の爲に祝すると書き送つた。夫れから三十八年に戦争が済んで、私も歸朝し、兒玉將軍も程なく凱旋して、將軍と面會して米國に行つた話をし、又將軍が滿洲で苦心した話も聴き、互に日露戦争の終局を喜んで居つた所、測らざりき間もなく兒玉將軍は突如病を得て此世を去り、兒玉家から將軍の訃を報せられて、直に同家に馳付け、其臨終の様を親しく聴いたが、寢に其最期の悲哀は何とも申し様無く家人の方々に對して、同情の涙を止め得なかつた。嗚呼兒玉將軍逝いて茲に十有三年を迎ふ。今や國家多事の時に際して、將軍の如き軍人として政治家たる偉材を失ひ、殊に世界的大戰に日本も參加し居る時に、將軍の如く偉人の生存し居らざるを甚遺憾に思ふ唯追悼追慕の念に堪へない。殖産新報社の請に依り、將軍の逸

内容見本

(60%縮小)

聯隊長當時の腕較

私は乃木大將と兒玉大將との關係を話して見やう。同じ防長の生れであるが乃木大將は長府の藩士で、兒玉大將は徳山の藩士であつた。乃木大將は東京で生れ、兒玉大將は國で生れたが、兒玉大將は年若くて、親父が死んだ時に相續が出来ない。そこで姉さんに婿を貰つて相續した、其息子さんが今の兒玉文太郎と云ふ人だ。それで乃木、兒玉兩將軍とも、漢學は少しやつたが、今の學問はまるでやつた事がなかつた。それで乃木大將も偉い人であつたが、兒玉大將も實に頭腦明晰で、總て見たり聞たりする事が直ぐ分る。陸軍で、あの位鋭い人は殆どないと、私は思つてゐる。此兩將軍が少佐時代に、兒玉大將は佐倉の聯隊長、乃木大將は東京の聯隊長で、此兩聯隊長が千葉縣下で對抗演習をやつた事がある。所が其時は兒玉大將の方が勝つたと云ふ譯で、當時『氣轉 希典 利かしたあの野狐(乃木)を、そくぶの兒玉にしてやられ』などと云ふ都々逸が出来た事があつた。其の後乃木大將は段々出世して、諸方の師團長から臺灣總督になつたが、あのやうに正直一方でやつたものだから、どうも思ふやうに行かなかつた。其代りに兒玉大將が臺灣總督になつて、乃木大將の後を引き受けてあの通り成功した。臺灣の今日を成したのは、全く兒玉總督の力である。兒玉大將は實に量も大きければ、人を知るの明もあり、人に任して能く使ふ腹もあつた。即ち兒玉總督がよかつたのは、あの後藤新平男を見附けて使つたのが成功なのである。後藤男を使ひ初めと云ふのは、日清戦争の終りに、戦争から歸つた兵隊の檢校をやらせる人選を、當時の兒玉陸軍次官から石黒男に頼んだ。石黒男は當時相馬事件に連座して、出獄したばかり

二十六、小妻の朝田時子

將軍は二十八年に新橋の一聲妓を落籍して臺灣に伴ひ來つた。姿色はさして美なるにはあらねど一種の氣節ある婦人で、前身を洗へば水戸藩佐藤某の女、後ちに朝田某の養女となつて朝田時子と呼んで居た。

その養父は田中平八郎即ち天下の糸平に年久しく仕へた文字ある男で、俳名を句正と呼び俳諧者間には多少その名を知られて居た。で時子も相應の教育を受け文才もうるはしく筆蹟も見事であつた。常に將軍の飲酒を戒めて一滴だにその唇に觸れしめず、月白く風清き良夜、一杯位はゆるせと將軍の左手頻りに動くを堅く押し止めて「公が強て禁酒の戒を破らせ玉ふならば妾は今日限りお暇を賜はるべし」と何時かな動かぬ……十年間一滴の酒をも口にしなかつたのは實に小妻時子の力であつた。

將軍薨去の後、時子は髪を斷ち、梵然として赤坂丹後町に住む。且暮將軍の冥福を祈りつゝ、將軍の墓に香花を手向くるを何よりの樂みとし、心を塵

104

付・児玉藤園將軍逸事 内容見本

アングリ、

「併しタッタ今電話を切つて驅付けたんですが」

「致方がないですね、今申上げた通り手筈は運んで終つたのですから」

「驚きましたな」

と、やがての事に倉皇として辭し去つた。

將軍の激怒憤懣 (下)

元來臺灣航路は内地との往復ばかりでなく、福建、香港各地と臺灣間の航路もあつて、その補助費は一箇年七十餘萬圓の多額に上つて居る。その内郵船會社は神戸、基隆間の定期航海に一隻の船を用ひて一箇年四萬有餘圓に過ぎないから、殘餘の七十萬圓はすべて商船會社が補助を受けて居る。會社の營業としては最大重要な部分を占めて居るものだから、殊に船舶新造の事も總督府と内約があつて、臺南、臺北、臺中、基隆、安平の諸船及び對岸航路に要する大仁、大義二船の如き、皆その内約に基いて建造したものが、それでもま

八一

だ輸送力の足りないので他の船舶を充當して居る程である。

斯く總督府は年々多額の補助を與へ航路の安全と擴張を謀り臺灣の人心を靜穩にしその發展を企圖しつゝある折柄、總督府に背を向け重要航路船舶を海軍省に渡すといふのは以ての外、沙汰で會社はなる程それが爲めに一時非常の利益に浴するだらうが、總督府の保護を受けて居る會社がその船舶を他に利用して一時の潤益を貪らうと云ふのは如何にも面白くない。會社の所業であると將軍は激怒したのである……こゝに商船會社の重役で兒玉少介と云ふのがある。同じ長州出身で長派の元老間にも絶えず出入する將軍とは分けても別懸なので、余は帝國ホテルへ行くと途中この兒玉少介氏を訪うて今日の一寸始終を語り、何とか緩和の手段を講じたが能からうと注意して直ぐその足でホテルへ來て見ると、將軍はもう小川鈞吉氏と船舶賃貸上の談判を進めて居る。其處へ海軍省の方を斷つて借上命令を取消してもらつた中橋氏が驅け附ける。追懸けて兒玉少介もやつて來る。將軍は澄した顔で

(65%縮小)

目次

快刀正に乱麻を裁らんとす	台湾事業公債法の發布
治台の大方針	蔬菜栽培の奨励
官紀振振	台湾米の輸出を禁ず
土匪招降策	將軍の対岸政策
清の敗將劉德約	將軍の激怒憤懣
牧民官としての將軍	荖雅寮陳家の陰徳
台湾神社の位置と明治橋	曹公祠の修理及其祭祀復興
故北白川宮薨去の遺跡保存	台北に於ける婦人社會
鎮南山臨濟寺の開闢	紳董懐柔の奧秘
台湾の慈善事業	如何に下僚に厚かりしか
耆老典と揚文會	宣教師を勞る
財政上の独立、専売制度と土地	この人にして此細を見る
調査事業	虚礼を忌む事蛇蝎の如し
	小妻朝田時子
	將軍中央政界に入る
	内相を拜し大鉦業を提出す
	日露国交斷絶
	英雄の襟懐欽すべき哉
	滿洲軍總司令部の編成
	遼陽、沙河の激戦
	黒鳩公何するものぞ
	烟台陣中に詩を賦す
	林檎水を三鞭酒と誤る
	奉天の大会戦、將軍戦況を天聴に達す
	將軍奉天に歸る、日本海海戦平和克復
	台湾總督の印綬を解かる
	嗚呼！將軍一夜地に墜つ

八三



側近・縁故者が語る児玉源太郎の人物像

戦史研究家 長南 政義

「名利如糞土」(名利は糞土の如し)。児玉の旧知である乃木希典が児玉に送った漢詩の一節である。児玉の人間性を象徴するのにこれほど適切な評言はないであろう。

有名な人物であるにも拘らず、本人の日誌・書簡といった一次史料や、本人の手元に残るはずの関係者からの来簡・職務上の書類の残存量が少なく、出典の曖昧なエピソードのみが流布されて人物像が形成されている人物に、児玉源太郎がいる。

児玉の三男である陸軍中将児玉友雄は、児玉急逝当時、「父の処には各種の機密書類があるという見込みで、後藤新平氏を主体として参謀本部(田中義一ら)陸軍省(寺内正毅ら)の上役が自宅捜査をして書類を全部参謀本部へ持って行った」と記しているが、この時押収された機密書類は、残念なことに、現在、防衛研究所や国会図書館憲政資料室に所蔵されていない。

児玉の場合、日誌や書簡といった一次史料が纏まった形で残されていないばかりではなく、意外にも正伝といえるような伝記が本人の没後に編纂されなかったことも、根拠が怪しいエピソードの類に頼った人物像が描かれてきた一因であろう。さらに、司馬遼太郎が『坂の上の雲』の中で描写した、明朗かつ裁断流るるが如しといった児玉の人物像に基づいて確立された児玉人気の高さも、「この人ならばあり得る」ということで、児玉の実像と隔たりがある虚像の形成に影響を与えていると考えられる。

児玉に関する伝記・評伝の類は、児玉人気に比例した形で多数存在するが、史料として利用可能な書籍は、宿利重一『児玉源太郎』(国際日本協会、昭和十八年)や児玉源太郎述『熊本籠城談』(有朋堂 明治三十三年)のみと比べてよく、『坂の上の雲』をはじめとする児玉を描いた多くの小説・評伝が宿利の著作をタネ本としているといっているであろう。

ところで、今回マツノ書店から復刻される、吉武源五郎編『児玉將軍十三回忌寄稿録』(原題『児玉藤園將軍』拓殖新報社 大正七年)は、児玉の十三回忌を記念して出版された本で、児玉と懇意であった寺内正毅や、日露戦役の際し満洲軍総司令部において児玉と寝食を共にしつつ作戦立案に執筆した田中義一、その他、児玉と近い関係にあった部下として指

導を受けたりした各界からの人士および縁故者約九十名からの談話を蒐集し編集した本で、児玉源太郎という人物の実像を知る上で貴重な史料であり、本書の頁をめくるたびに、今にも児玉の息遣いが聞こえてきそうな好著である。

編者の吉武は、本書以外にも、『児玉大神を祭る』(出版社不明 一九二一年)『児玉神社献詠歌集』(拓殖新報社 一九三九年)『南洋南支写真帖』(拓殖新報社 一九一六年)といった本を執筆した人物である。吉武は、児玉の十三回忌に際して、児玉の「精神徳風を新に記念せんが為め」に本書を編集したというが、本書を一読した人なら、この目的が十分に達せられていると感じるであろう。

本書には多数の写真が掲載されており、特に、日露戦役開戦の前年、明治三十六年に参謀次長田村怡与造が急死し、後任人事が難航した際に、当時内務大臣兼台湾総督であった児玉が、降格人事であることを承知の上で後任の参謀次長になることを引き受けた際に乃木が児玉に贈ったとされ、宿利重一『児玉源太郎』でも引用されている漢詩の一節「名利如糞土」の現物の写真も同書に掲載されている。児玉を描いた小説で必ずといって過言でないほど頻繁に引用されるこのエピソードの真実性が証明されたわけである。

さらに、習志野で実施された対抗演習で、児玉が巧妙な作戦で乃木希典率いる第一聯隊を撃破し、乃木が「到頭児玉にやられた」と洪然大笑したという有名な挿話も、旅順攻略戦で盤龍山P堡壘奪取の戦功で勇名をはせた一戸兵衛の口から語られている。

「どうも陸軍の者は、常識が欠乏して居って困る」と語り、官制上、軍人を使わなくてもよい仕事には、多くの場合、軍人でない人物を使用した、という陸軍中将堀内文次郎の談話や、旅順攻略戦をめぐる児玉に関する「世に知られて居ない」秘話を開陳した上で、児玉「將軍の死を早めたのは、結局旅順の戦が因である」と指摘した、南満洲鉄道株式会社秘書役上田恭助(日露戦役中児玉の傍で仕えた人物)による寄稿も、本書でしか読むことのできない貴重な挿話である。

○ ○ ○
今回の復刻に際して、本書の付録として、横澤次郎『児玉藤園將軍逸事』(新高堂書店、

大正三年)が収録されている。

著者の横澤は、児玉に親炙すること二十年。その内の九年間を秘書官として児玉に仕えた人物であり、児玉の左右に親しく奉侍した関係で、「(児玉)將軍在世の小行偉蹟、深く印象するもの尠からず」と自ら述べている。

横澤が本書を執筆したきっかけは、職務上の過誤により圜圜の人となり、獄窓寂寞の日々を送る中で、「(児玉)將軍の英姿は毎に眼前に髣髴たり、轉た往事を回想して感興限りなし」といった感情を抱いたことにあった。そして、横澤は、獄中で児玉の逸事を記憶に刻み、出獄後にそれらを記述して一書と為し、自身の日誌により年月日を訂正し、本書を完成させたという。

本書は、児玉の台湾総督就任から始まり、紙幅の殆どを台湾総督時代の児玉を描くことに費やしている。児玉に仕えた時代に、「將軍の涙を見たことが前後三回ある。而して前後三回とも、何れも所謂公憤の余りに迸った熱涙であった」と回想するほどの横澤の手による伝記だけに、どの頁からも「多情多涙の熱血漢」と評された児玉の横顔が伺える好著であり、中でも、明治三十三年、義和団事件勃発当時、大阪商船会社が台中丸を海軍省御用船とする決定を下したことに対し、児玉が台湾統治上策の得たものではないとして癩癩玉を破裂させ、大阪商船会社社長の中橋徳五郎に電話をかけ、「僕は児玉だ、海軍省の強制命令だから致方ないといふのか、そんな根性なら正宗の業物を引抜くからそのつもりで居たが能からう」と、海軍省の我儘と商人の強欲さに対して激怒するシーンは、児玉の面目躍如といえ、本書の目玉の一つである。

史料価値が高い『児玉將軍十三回忌寄稿録』(原題『児玉藤園將軍』)・『児玉藤園將軍逸事』であるが、両書共に、これまで、児玉を主人公とする小説や評伝で使用されたことが少なかった。その理由は、両書がともに、稀覯本中の稀覯本であることに存在する。『児玉將軍十三回忌寄稿録』の場合、古書店でもほとんど流通せず、従って入手困難な上、本書を所蔵している図書館が、国会図書館、国際日本文化研究センター、九州大学付属図書館など少数しか存在せず閲覧にも不便なため、本書の存在があまり知られていなかった点にある。『児玉藤園將軍逸事』は、国会図書館にすら所蔵されておらず、国内の大学図書館で本書を所蔵する図書館は、四館程度であり、古書店の店頭にも並ぶことも殆んどない。今回マツノ書店が復刻されるのを機会として、本書を繙かれて、談話者の「生の声」から、児玉の実像に迫って見られてはいかがだろうか。